

今回は志村ふくみのこの数年間の染織のじごとを明らかにするものである。その内容は雛形、コラージュ、屏風、着物の展示である。

私のじごとは現代美術商である。今回の“裂を継ぐ”展は私としてはこれまでにない展覧会となつた。十年前、京都で無地の着物十二点を見て強く感動して以来の念願である。

染織家志村ふくみの存在の根底には、思想家、文筆家としての姿、そして歴史や現代美術への理解、現代社会への強い関心などが見えてくる。その根本的な考え方は、「自然」であると私は思つていい。自然是嘘をつかない。過失や誤りをおかすのは人間である。すでに地球は壊れつつあるではないか。グローバルな視野でじごとをしている志村ふくみの未来を期待したい。

志村さんと私は共通の大切な友人を持っている。詩人の宇佐見英治氏、旧知の森本隆氏、佐久間幸子さん(マリアさん)、美術評論家の黒田亮子さん、造本家の山室眞二氏、元美術出版社の上甲ミドリさんなどの方々である。どの方についても思いは深いが、まず、すでに亡くなられた宇佐見英治先生について記しておきたい。先生は「工芸家と芸術家を比較して、前者が後者より劣るとするのは当たらない。志村ふくみは前者であるが、後者を凌ぐ作家である」と志村さんを高く評価しておられた。お二人の対談・書簡集『一茎有情』が、一九八四年一月に用美社から出版されている。志村さんは卓越した文筆家である。

私が京都の何必館で志村さんに初めてお会いし、一月から十二月の無地の着物に感動したのは、一九九六年二月十日の

午後三時頃であつたことは忘れることができない。実はこの展覧会を教えて下さつたのが、知己を得て四十四年になる森本隆さんなのである。森本さんは私の最も尊敬する方であり、志村さんとの交友は少なくも半世紀以上にわたると思われる。私にとつてかけがえのない方である。

志村さんと鶴見和子さんの対談を綴つた近刊『いのちを纏う』(一〇〇六年、藤原書店刊)の中で「マリアさんとの出会い」として語られている佐久間幸子さんは、志村さんの着物を初期から収集されてきて、そのコレクションは六十点に及ぶ。胸のすくような大胆さを秘めながらも楚々とした可憐な風情の漂う方である。自分で着ることはあっても、あくまでも芸術品として非常に注意深く扱われたのでたいへん状態が良く、これをすべて志村さんの故郷、滋賀の県立美術館に納めたのだつた。貴重な初期からの着物が散逸することなく最もふさわしい場所に納められたのである。このマリアさんの審美眼は、細川護立氏によつて育てられたことであるが、その眼で志村ふくみの作品を常に展覧会の初日に見て、一番気に入つたものを一度も値切ることなく買い続けたのである。滋賀県立近代美術館には着物とともに多くの資料も入つた。美術館にとつては誇らしいコレクションとなり、志村さんにとっても幸運なことである。すばらしい親友である。

志村さんはまた、優れた社会派の人物を友人に持つてゐる。先に触れた鶴見和子さんは高名な社会学者であるが、亡くなられるまで着物に深い愛着を持つておられ、手織りの着物はご自分のいのちと交流し創造の源となるとおつしやる方である。また、石牟礼道子さんの全集の第九巻『十六夜橋』に志村さんは「自分の内部に入りこんでしまつた物語」という解説を書かれている。全集の表紙のデザインも志村さんの手になるものである。このお二人とも周知のように、非常に重要な社会的なしごとをしておられる方々である。志村さんの視野の広さをうかがい知ることが出来る。

志村さんは十年ほど前に遠く中近東まで、美の源泉を求めて旅をしておられる。イラン、トルコ、韓国、日本の神社仏閣を訪れ、日本独自の染織文化が育まれるまでの長い歴史を辿つてこられた。

志村さんの詩「Mへ」を読ませていただいた。何とそれはマチスのMであつた。その詩を読んだ時の驚き。マチスは晩年からだがやや不自由になつてから、たくさんの美しい切り絵を作つた。自由に遊ぶ作品は、タブローとは違う軽やか

さでわれわれの心をあたたかく包む。志村さんも丹念に染め上げた糸で精魂こめて着物を織り上げた時に残った裂地を蘇らせる。とらわれのない発想のもと、台紙の上に裂地を置いていく。「いくらでもうまれてくるの」とたのしんで出来上がる作品からは、やはり自然や街の風物が彷彿としてきて、見る者をなつかしい世界に誘い出す。又、シンプルな雛形は大作の着物が手元を離れていった時に残された裂地で作られた。環境汚染が進み、侵されていく自然を思うと、もうこの色は染めることが出来なくなるかもしれない。日本の染織文化を伝えてくれる貴重な作品である。

志村さんは長年にわたつて現代美術をよく見てこられた。P・クレー、H・マチス、J・ミロ、M・ロスコ、F・ステラ……。私は瀧口修造先生に教えていただいて現代美術の画廊を三十年続けてきた。すでにライフワークのオマージュ瀧口修造展は二十八回を数える。瀧口先生にこの志村ふくみ展を見ていただければ、きっと喜んで下さつたと思うのである。

さて、志村さんの究極の関心事は色彩であると思う。ここに再録した岩波書店の月刊誌『思想』(一九九九年十二月 第九〇六号)特集「ゲーテ 思想の現象学」の巻頭に掲載された志村さんの文章「自然という書物」は、緑についての記述である。自然に浸り、自然とともに歩み、自然の不可思議にからめとられていた。その入口は緑であつたという。経験をふまえて深まる謎、その不思議の国から手引きしてくれたのがゲーテの色彩論であった。光のすぐそばの黄色と、闇のすぐそばの青が混ざつて緑となるという言葉に出会つた。それは十年余りをさまよい一つ体験してきたこととぴたり符合し、志村さんは宇宙のメッセージをしっかりと受け取ることになつた。ひたすら自然の神秘を見つめ続けてきた人への贈り物であると思う。深い叡智によつて宇宙の神秘に近づいてゆく志村さんにとっては、道はなお遙かに続いているに違いない。生き生きと輝いている志村さんに脱帽である。これから更に新しいしごとを楽しみにしている。

志村さんはすでに二十冊余りの著書を出版しておられる。希有の文筆家であることは周知の通りである。その文章は香り高く詩的で、しかも歴史文化への優れた洞察力と深い理解には驚くほかない。染織によつて導かれた造化の不思議が志村さんに深い叡智を授けていると思う。このカタログの著作紹介に記載していない本も多くの方にお読みいただきたい。

最後に、志村ふくみさんに改めて御礼申し上げます。お忙しい中、打ち合わせのために京都からたびたびお出かけいた

だき感謝申し上げます。十一月、この展覧会の準備中に、第十四回井上靖文化賞を受賞されることとなりました。深い思索から生まれる染織、文筆、講演など、その生き方に高い評価が与えられたと聞きます。心からのお慶びを申し上げます。

カタログにテキストをお寄せくださいました黒田亮子、小川稔の両氏、またこの展覧会のためにお力を貸して下さった山室眞二氏、会場をご提供くださいましたPOLAのご好意に厚く御礼申し上げます。直接のお世話をいただきましたボーラミュージアムアネックスの為野嘉秋氏と、展示設計を担当してくださいましたスペースプランニングの結城大介氏にも、心よりの御礼を申し上げたい。他にお名前を記しませんが、多くの方々のお力をお借りしたことを探し感謝いたします。

（佐谷画廊主）